

心に吹く風

——樋口一葉「闇桜」論（その一）——

峯 村 至 津 子

一 風もなく散る桜——冒頭と結末との対照——

溺愛する娘が風に晒されることを案じた両親は、まだ吹いてもいない風をも不安に思い、娘を守ることに熱心であった。しかし、娘を襲い、短命に終わらせたのは、周囲の人々が懸念していたような風ではなかった。

樋口一葉の文壇第一作「闇桜」『武蔵野 第一編』（明治二五・三・二三 今古堂）を、風をキーワードとしてこのように要約することができるだろう。本論文は、「闇桜」を取り上げ、デビュー当時の一葉の小説作法の実態を探ろうとするものである。

「表現にぎこちない処が可なりあつて、取立てて言ふ程の作ではない」という湯地孝氏の評言以降、本作は長らく、「習作らしい稚拙さを止め」た、「和歌的抒情性から踏み出せないでゐる小説家としての幼さが見られる」作品とい

低評価の中に置かれてきた。笹淵友一氏が右の評価を下す際に提示した、「伊勢物語」の筒井筒の恋と和歌の歌題「忍恋」という「二つの主題を接木した観があり」、後年の「たけくらべ」とは異なつて初恋が実らないことを「余儀なくする境遇が客観的に描かれ」ることなく、「専ら千代の心理描写だけに頼つてゐる」などといった見解も、研究史の中で長く受け継がれるものとなつた。その後、評価の見直しが試みられてはきたものの、一葉がこのデビュー作をどのように造形しようとしたのか、その実態の解明にはまだ目が届いていないところがあるように見える。

「闇桜」は十六歳のヒロイン千代の悲恋を描いたもので、(上)・(中)・(下)に分かれている。成立の事情はある程度日記から窺うことができ、従来の研究に於いても早くから整理されてきた。⁽⁴⁾ 明治二十五年二月四日に半井桃水から雑誌『武蔵野』発刊計画を告げられ、「十五日までに短文一篇草し給はずや」との執筆依頼があり、⁽⁵⁾ その日に持参していた「完成のものならねど」といった状態の未完成の草稿を桃水に見せた一葉は、掲載の許可を得て、⁽⁶⁾ その改訂にかかった。が、十二日の時点で「まだ上の巻斗にて中下とも残れり」という切迫した状況であり、⁽⁷⁾ 「十三日 晴天 朝来小説にかゝる 終日従事 此夜終夜 暁がたに少しねむる」、「十四日 大雨 終日小説従事 灯明に及んで全備す」⁽⁸⁾ という過酷なスケジュールで(中)(下)を完成させ、十五日に桃水の許に持参した。⁽⁹⁾ こうした余裕のない状況下での執筆に於いて、一葉はその文壇デビューの作品と如何に向き合つたのか。

本章ではまず、(上)の冒頭にあるヒロイン千代の紹介文が、(下)末尾の叙述と照らし合わせながら読むことを要求するように仕組まれている、その構成に着目し、初期一葉の小説の書き方の一端に迫りたい。

(上)は、中村・園田という隣り合う二つの家の親密な関係を語るところから始まり、園田家の一人息子良之助と中村家の一人娘千代の紹介に移る。良之助の紹介が「園田の主人は^{あるじ}一昨年^{をとし}なくなりて相続は良之助^{りやうのすけ}廿二の若者^{なにがし}何某学校の通学生とかや」⁽¹⁰⁾ (二頁)と、簡潔に必要な最小限の情報を提示する(初出本文で一行と七文字という分量である)のに

対して、千代の紹介文は初出本文で八行と十四文字という分量を割き、レトリックを多用した文体で綴られている。ここでは特に、後の展開の伏線として機能している部分に絞って見てゆく。

中村家では男子が早世していることもあり、十六歳になる一人娘の千代が両親の寵愛を一身に受けている。そもそも千代という命名も、「願ふはあし田鶴の齡ながれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ」（二頁）とあるように長寿を願う親心によるものであることが明示されているが、これを千代が短命に終わる結末と対照させた時、その薄命を際立たせる伏線として、実に皮肉な命名であることが後からわかる仕組みになっている。

また、「かざしの花に吹かぬ風まづいとひて」（二頁）という部分は、いやが上にも千代の身を案じる周囲が細心の注意を払って彼女を見守る様子を表現しているが、ここで「風」とは千代に降り掛かるかもしれない災厄・不幸・苦難を象徴していると言える。髪に挿している花を風が散らすことのないよう、まだ吹いてもいないうちから風を嫌がる、というのだから、「風」は千代の外側にあつて千代に吹きつけてくるものとして周囲の人々に意識されていたということになるが、この箇所についても（下）末尾との対照に注意しなければならないだろう。「風もなき軒端の桜ほろ／＼とこぼれて夕やみの空鐘の音かなし」（二三頁）という千代の死を暗示するこの一文に「風もなき」とあるように、周囲の人々の懸念とは裏腹に、千代という花を散らしたのは、彼女に外から吹きつけてくる風ではない、ということが文字の上で明らかに示されているのである。それでは千代という花は何によつて散つたのか。（中）（下）を通してそれを描くことがこの作品の眼目と言えるが、それについては本論文の二章以下で考察を示す。

ここでは、右のように複数見られる対応関係が偶然であるとは考えにくく、意識的に配されているだろう、ということを描きおきたい。冒頭部の叙述と、そこで示された親たちの願いが裏切られてゆく展開を経ての結末との対照に注意すれば、そこからは綿密に構成を練ろうとする執筆態度を見て取ることができる。また、右で取り上げなかつ

た箇所も含め、千代の紹介文は、掛詞を用いたり縁語を連ねたり、比喻や慣用句をちりばめたりと、一葉の和歌の素養を基盤とした、レトリックを多用した文体が用いられている。「闇桜」に於けるこうした文体の特色については従来から言われ続けてきた⁽¹²⁾。が、まず押さえておくべきことは、そうしたことが無造作になされているわけではない、ということであろう。ここで見た冒頭部について言えば、それは千代の紹介文に集中的に用いられていて簡潔な良之助の紹介文とは対照的であることから、意図的なものであることがわかる。そこに留意すれば、レトリックを多用した凝った文体が、幼い頃から世の人の賞賛の的であった並外れた美しさを持つ千代が周囲の人々に大切に守られ慈しまれていることを提示する内容と連動している、と見ることもできるのである。

こうしてみると、切迫した成立事情であるにも拘わらず、また、野口碩氏が推定するように段階を追っての浄書であった可能性も高い(注9参照)のだが、「闇桜」は作者による統率が行き届いた作品という感が強くなる。こうした緊密な作品世界の構築は、本格的に小説に筆を染めたばかりの一葉の苦心の跡を示している。そしてそれと共に、この時点での一葉の限界をも窺わせるものであるという見方もあり得るかもしれない。即ち、計算が行き届いた執筆が必ずしも名作に繋がるとは言えず、むしろ、こうした作者による統率の強度が、例えば後年の「にぎりえ」(明治二八・九)に見られるような作品に満ちるエネルギーを削ぎ、最初に引いた湯地氏や笹淵氏の言う「表現のぎこちなさ」や「習作らしい稚拙さ」、注12に引いた山田氏の「空疎な作品」などといった評言を招き寄せる一因になっている可能性も否定できないからである。ただ、仮にそうであるとしても、本章で見たような冒頭と結末との対照はこれまでの研究で注意されてきておらず、「闇桜」という作品の性格を把握するためにも、一葉の小説の書き方の変遷を辿るためにも、こうした初期小説の執筆のあり方には注意しておく方が良いと考える。

「我れ筆るといふ名ある上はいかで大方のよの人のごと一たび読みされば屑籠に投げいらるゝものは得かくまじ」

「一片の短文三度稿をかえて而して世の評を仰がんとするも空しく紙筆のつひへに終らば猶天命と観ぜんのみ」——これらの文は、「闇桜」執筆と近接した時期に書かれた随筆「森のした帥 一」の最後に置かれている断章の中にあるものだが、「闇桜」の書き方を見る限り、右のごとき決意表明も口先ばかりの大言壮語とは言えないだろう。

千代の紹介文では、従来から言われているように伝統的な発想や表現技巧を駆使し、語の緊密な連鎖のうちに千代を囲い込む。こうして伝統的イメージと重ね合わせるように表現される作品冒頭部の千代は、常套表現の中に埋没してしまつて生々しい現実感^⑩は欠如しており、絵に描いたような幸せな一家・恵まれたヒロインが提示されていると言える。それが、(上)の末尾 良之助と連れ立って出掛けた摩利支天の縁日での学友による千代へのからかいをきっかけにひび割れてゆく、その過程を描いたものとして、本作を捉えることができる。他者の視線を媒介として、それまで意識していなかった自分自身に気づいた千代は、(上)から一転、(中)では恋の物思いに囚われることになる。

その新たな展開のきっかけとなる、(上)末尾の右に示した箇所^⑪の直前に、それを準備するかのように、「生写朝顔話」(「生写朝顔日記」とも。以下「朝顔日記」と略す)が引用される。ヒロイン深雪の恋の苦難を描くこの作品がここで持ち出されることにどのような意味があるのか、次章ではそれを検討する。

二 風に翻弄される物語——「生写朝顔日記」引用の効果——

① 意図的な引用

「闇桜」(上)の後半部、千代と良之助が摩利支天の縁日に連れだつて遊ぶ場面に於いて、千代と良之助の口語調の会話が展開された後、縁日の様子を叙述する部分で、唐突に「朝顔日記」を踏まえる叙述が出てくる。

こちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれく栗の水飴

心に吹く風

めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の塩せんべいかたきをむねとしたるもをかし。(四〇五頁)

擬音「カラコロリ」には、良之助に呼ばれて走りよる千代の下駄の足音と琴の音が掛けられており、その琴を弾く「盲女」を「朝顔日記」の登場人物深雪(朝顔)に擬えていることは、これまでも意識されてきた。岩波新大系明治編の菅聡子氏による「闇桜」注釈には、「琴ひく盲女」の姿に「朝顔」の姿を重ねている」とあるが、それに加えて、下駄の音と琴の音を二重に響かせる「カラコロリ」という擬音を媒介に、千代と朝顔に擬せられる琴弾く女が繋がる、という文の連結から、千代と朝顔を重ねるように促されているとも言えるだろう。

同じく脚注二一には、「本文は「琴」とするが、状況からすると不自然。語調から「琴」としたか、あるいは弦楽器一般をさす意で言ったものか。」とある。緑日という場に於いては琴よりも立つて弾ける三味線の方が場所をとらず適当ではないか、という趣旨と思われるが、わざわざ傍線部のように注する必要があるのではないか。続く箇所で「今の世の朝顔か」と「朝顔日記」のヒロインの名前を出し、当該作品の中で重要な役割を果たす歌の一節「露のひぬまのあはれく」を引いているところから、ここで作者が「朝顔日記」を持ち出したかったのは確実である。「朝顔日記」には三味線も出てくるが、クライマックスの場面(島田の宿の場面)で深雪が奏でるのが琴であることから、「朝顔日記」の深雪と言え「琴」という連想が働く。よって、「朝顔日記」に繋げるために、「闇桜」のこの場面の状況としては不自然であつたとしても、わざわざ「琴」を持ちだしていると言えるのではないだろうか。「琴」を出し、そこから「朝顔日記」に繋がているところから、同作品をここで登場させ、読者に意識させることに意味があつたのだという解釈が可能であろう。ということは、「闇桜」という作品を展開する上で、「朝顔日記」を踏まえることによる効果が作者によって期待されていたということになる。

明治初年から明治二十五年までの「朝顔日記」の出版の状況としては、国立国会図書館のデジタルコレクションで

閲覧できる限りでは、注16に示したように、全編絵入りで簡単な文章で梗概が付されている草双紙形式のものが多く、ほか読本形式のものが一件、それ以外は特定の段を抜粋した浄瑠璃本が多く出版されている（圧倒的に宿屋の段が多く、次いで浜松の段、摩耶山）が、明治二十年代に入ると全編翻刻した丸本も東京・大阪で出版されている。一葉の場合、周知のように、寄席で義太夫を聴いていたことが日記から窺える一方、「につ記」（明治二五・九・一八）に「近松の浄瑠璃集をよむ」（『全集三』一七五頁）とあるように、テキストを読む、という形でも享受していたことが窺える。⁽¹⁸⁾後年の「われから」（明治二九・五）の冒頭では、近松の「大経師昔暦」を場面の状況や文言のレベルまで踏まえているところから、台本を読むということを念入りに行う姿勢が彼女の中にあつたことがわかる。今回、「朝顔日記」引用の意図を考察し、それとの比較に於いて「闇桜」の特色を明確にするために使用するのは、『増補生写朝顔日記』（明治二四・一・二一 金桜堂）とする。⁽¹⁹⁾明治二十五年一月頃から二月にかけて執筆された「闇桜」と発行年月日が近く、また発行元の金桜堂は、「闇桜」掲載誌『武蔵野』の発売所である『武蔵野 第一編』見返しによる）ところから、底本とした。

「朝顔日記」の主人公は、宮城阿曾次郎（後に駒沢治郎左衛門）と深雪の二人で、阿曾次郎は大内家の「儒学の師範」駒沢了庵の甥であり（大内館の段、一～三頁参照）、深雪は岸戸家の家老、秋月弓之助の娘である（宇治の段、一三頁参照）。「家の接木（つぎき）の一人娘」（弓之助家敷の段、三六頁）とあるように、一人娘という設定が「闇桜」と共通している。本作は、ヒロインの深雪が幾多の艱難辛苦の果てに、思いを寄せる阿曾次郎と結ばれるという内容であるため、ここで「朝顔日記」が持ち出されるところから、「闇桜」の読者でその内容を把握している者は、千代の恋の苦難とその果てのハッピーエンドを予想するだろう。しかし実際のところ、両作には大きな隔たりがあり、そうした期待を抱いた読者は裏切られることになる。論者は以前、一葉後期の小説について、古典や同時代の先行作品をあるところまでは踏まえな

がら、それらとの落差を見せてゆく手法が見られることを指摘したが、こうしたことは、初期の段階から意識されていたことになる。

一葉が「闇桜」を書くうえで、「朝顔日記」の引用は、具体的にどのような意味があったのか。次節からは「朝顔日記」の内容を「闇桜」と比較し、それについて考える。

② 恋の成就をめぐる相違点

阿曾次郎と深雪は、宇治川の蚩狩の折、宇治橋の近くで出逢う（宇治の段）のだが、この場面にこの物語の基本構造はすべて表れていると言つてよい。「闇桜」との対比が明確になるように、「朝顔日記」の内容を紹介しながら、主に「闇桜」との相違点を見てゆく。

まず、「朝顔日記」では出逢いの場面に於いて既に、主人公たちが結ばれる結末に向けて伏線が張られている。実は二人が出逢う前から彼らの将来は予告されていたし、⁽²¹⁾ 同場面で深雪が謡う歌の詞章も、二人の結婚を予想させるものとなっている。これらは物語の結末での阿曾次郎（治郎左衛門）の科白「是迄かんなん心苦して廻り逢たもつきせぬ縁し（中略）友白髪迄添遂ん」（駒沢上屋舗の段、二二九〜二三〇頁）と呼応しており、出逢いの場面で示されていることを裏切らない展開となる点は、「闇桜」と正反対であると言える。（ただし、呼応であれ対照であれ、冒頭部と結末を結ぶ線が張られているという点では、両作は共通しているとも見ることが出来る。）

次に見ておきたいのは、「朝顔日記」では、主人公二人が最初からお互いに心惹かれ、思いを伝え合っているという点である。⁽²³⁾ 注23に物語展開を示した（二人が明確に意思表示し合っている箇所）に傍線を付したように、風や狼藉者といった偶然の出来事に導かれながら、特に深雪の側からの積極的な意思表示も相俟って、二人の思いはこの出逢いの場面で早くも成就しており、これは物語の末尾に至るまで揺らぐことはない。

以上見てきたように、「朝顔日記」では、二人の恋路を阻む要素は、主人公たちの内面には存在しない。実は当初から結婚が想定されていた間柄であることに加え、主人公二人の心ははじめから一致し、お互いの相手への思いは変動することがないため、その点では二人の心は安定していて、そこに物語を動かすような要素は見られないのである。これらの点は、千代がなかなか良之助への思いを口にする事ができずに内向させ、千代と良之助の意識はすれ違い、終には千代が死に至ることで二人の仲が結婚といった形では成就しない「闇桜」とは大きく異なっている。

③ 〈風〉に象徴される物語展開

「朝顔日記」に於いて主人公たちの思いが出逢った当初から成就しているのであれば、その恋路を阻み、物語を動かしてゆくものは何か。阿曾次郎と深雪の科白の応酬「先刻風に取れし拙者が腰折、スリヤ 此お船へ、アイチつて来たのが縁のはし」（宇治の段、一四頁）に端的に表れているように、二人を引きあわせたものが「風」であるのと同様、二人の結婚を引き延ばし、その道筋をヒロインが身を受ける苦難で彩るのも「風」に象徴される偶然の出来事による。そもそも当初阿曾次郎が詠んだ歌には「諸人の行かふ橋の通路は、肌涼しき風や吹らん」と「風」が詠み込まれていたが、「かたへに置ばさつと吹風」にまかれて短冊は、ひらりくくとひらめきつゝ、川辺の船へちり込けり」というように、吹く風が主人公二人の出逢いのきっかけを作る（同右、九頁）。そして以下も、この物語を動かすのは、主人公たちの内側に存在する何かではなく、「風」に象徴されるような外在する偶然の出来事である。明石の浦での偶然の再会と別れ（注25参照）の後、国元に帰っても鬱々と過ぐす深雪の述懐に、「過し明石の浦波のうらめしい、追風のかぜ嶋かくれ行恋人の、船おしぞ思ふ思ひをば誰にいはふぞ語ふぞよくく結ぶの神にさへ、見放されたる憂身かと、心の内に口説泣、女心ぞいちらしき」（弓之助家敷の段、三六頁）とあるように、彼女は自身が「風」に翻弄されることを嘆くのであって、自分や相手の思いによって悩むことはない。

この後、深雪の父弓之助は主命により、大内家の家臣駒沢治郎左衛門と深雪の結婚を決める。治郎左衛門と阿曾次郎は実は同一人物であり、深雪と阿曾次郎がやはり結ばれる運命にあることが暗示される一方で、阿曾次郎が駒沢家の家督を継いで改名していたという事態によつて、それを知らない深雪が結婚を厭い、「いつそ身を投て、死で未来で添が染しみ」(弓之助家敷の段、四四頁)と自死することを決意し、出奔するという展開に至る(同右、四〇〇四六頁)。この後、嘆きのために盲目となつた深雪が阿曾次郎と再会し、目が見えるようになり(宿屋の段、最後二人が結ばれる大団円(駒沢上屋舗の段)まで、外在する要素に導かれて出来する劇的な展開にヒロインは翻弄されるが、その間常に深雪が阿曾次郎を思う気持ちそのものには迷いがなく、変節しない心の強さが強調されている。

④ 「朝顔日記」引用の意味

こうしてみると、「朝顔日記」の物語展開は、本来安定しているはずの二人の関係や心に、外から風が吹きつけてその安定を乱すというふうに要約することができるだろう。その不安定な状況からの回復も、「奇縁」「ふしぎ」といった言葉が象徴しているように(駒沢上屋舗の段、一二九頁)、外在する出来事に導かれたものと言える。⁽²⁷⁾それに対して「闇桜」の方は、本来安定させることができるはずの二人の関係や心であるはずなのに、千代の心に生じた(風)がそれを吹き乱して安定に至らせないと要約できると論者は考へる。

従来の「闇桜」研究では、「朝顔日記」引用の意味について殆ど言及されていない。橋本のぞみ氏が「細部や結末こそ異なるが、良之助を思いつつも結ばれることなく患い、死へと赴く千代の恋と通じる要素を内包した話」というように言及しているが、本章で見たように、「通じる要素」よりも両作の対照が際立っていると言える。「闇桜」で引かれる、阿曾次郎が深雪の扇子に認めた歌「露のひぬまの、朝顔をてらす日かげのつれなきに、哀れ一むら雨のはらくと、ふれかし」(宿屋の段、一二三頁)は、「朝顔日記」に於いては、さまざま「つれなき」ことに見舞われながらも、

「雨」に象徴される天の恵みが訪れて、深雪という花を萎れさせずに彼女は救済される、というように、物語展開と合致している。「闇桜」は、ここでの歌を引きながらも、それとは全く異なる展開を辿る。

千代は、朋友からのからかい（偶然の出来事）によって、幼馴染みであった良之助に対する意識していなかった思いに目覚め、心の中で煩悶を繰り返し（中）、衰弱して死に至る（下）。偶然のきっかけがあったとしても、自らの内にもともと潜んでいた思いを改めて意識することで生じる葛藤という、千代の内面にあるものが小説を動かしてゆく力になっていることは間違いない。周辺の同時代小説との比較から、「外的な要因で幼馴染みの恋が実を結ばず悲劇に終わるという筋展開が多い」中で、「闇桜」における千代の悲劇は、内的要因によって引き起こされたものとして描かれている」ことを指摘した屋木瑞穂氏の研究が既に⁽²⁹⁾あるが、そもそも「闇桜」作中に、外在的要因によって物語が展開する「朝顔日記」を意図的に引用することで、ヒロインに内在する要素によって展開する「闇桜」と対比させようとする意識が看取されるのである。そうしたことの結果として、屋木氏が言うような、同時代小説の中の「闇桜」の独自性も導かれたということになるのではないか。

「朝顔日記」では「風」が物語を動かす鍵として用いられており、本論第一章で論じたような「闇桜」に於ける「風」という語の意図的な用い方も、「朝顔日記」を意識している可能性がある。「朝顔日記」を引用することには、本章①で見たように作者の意思が表れているし、「闇桜」という作品がその核心に向けて大きく動き出す直前に置かれていることから、「朝顔日記」との対比が意図的に図られていると言えるだろう。それとの対比によって際立ってくるものが、「闇桜」に於いて、作者一葉が重要視したものということになる。こうしてみると、一葉の描きたかったものを理解するために、「朝顔日記」に注目することは意味があると考えられる。

さて、先に「闇桜」に於いて千代と良之助の関係は「本来安定させることができるはず」と書いたことに違和感を

覚える人は少なくないだろう。なぜなら、二人は当時の法に照らして絶対に結ばれることがない関係として設定されている、というのが定説になっているからである。論者は、こうした従来の読み方を改変する必要があると考えており、それについて次章で確認する。

三 千代と良之助の結婚は不可なのか

① 先行研究への疑問

千代と良之助の結婚については、岩波新大系の菅聡子氏による注釈に於いて、旧民法の条文を引きながら次のようにまとめられている。

良之助が千代のもとに入夫するためには、家を廃絶しなければならないのである。一方、一人娘の千代の場合、（中略）中村家のただ一人の推定家督相続人である。彼女を廃嫡し、その上で養子をとることが法律上可能であるかどうか、条文からは判定しかねるが、いずれにしても多大な困難を伴うであろう。よって、『閨校』において、良之助がすでに家督相続を済ませており、さらに千代が推定家督相続人であるという設定は、少なくとも公布された民法にてらした限りでは、二人の恋愛の成就を決定的に阻む要因となりうるのである。（補注二四九頁）

このように二人が結婚できない間柄として設定されているという読み方は、和田繁二郎氏の指摘以降、満谷マーガレット氏や滝藤満義氏、野口碩氏、屋木瑞穂氏らに受け継がれた。右の菅氏の注は、ほぼそのまま野口氏の論を踏まえて書かれている。その後の「閨校」研究に於いてもこの読み方は踏襲され、疑義を呈している論は見当たらない。しかし、これを自明のこととして受け入れるには、拭いがたい不審の点が幾つも存在するのである。

まず不審であるのは、先行研究の読みが正しいのであれば、「閨校」（中）を殆ど費やして展開される千代の物思い

の中で、本来その中心を占めるべき、法律上の外的要因が一切意識されていない、という事実である。野口氏は、「明治の家族制度ではひとり息子とひとり娘は結婚できないのであり、千代の悩みはそこにこそ本当の原因がある。そしてそれが、両家の事情の間に横たわる侵し難い壁であつて、千代はその越境が出来ずに悩むのである」(二三頁)と述べているけれども、千代がそのことで悩んでいることを示す叙述が本文中に一切見られない。ただ野口氏もその点については意識はしていて、「しかし、作品はその真相を全く垣間見せないで、あたかも千代の性格が引き起こした悲劇であるように進行する」(同右)、「家族制度上良之助との結婚が極めて困難である事など、千代は殆ど意識して居ないかのように見える」(二六頁)と、先の論述と矛盾する見解を続けて提示している。なお、野口氏は「殆ど」と書いており、屋木氏も千代の葛藤の中で法的問題が「核心的な位置を占めていない」(五頁)と述べているが、こうした曖昧な表現は妥当ではなく、家族制度に関わる問題についての意識は全く作品の中に窺うことができない。

次は、野口氏も着目している、自分と良之助の結婚が不可能であると考えて悩む千代の述懐である。

君様が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を尽して糸竹文芸備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尚なるべし及ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせん夫こそは悲しかるべきを思ふまじく他(中、七頁)

千代が考えている良之助に恋心を打ち明けられない理由とは、自分が良之助の結婚相手に相応しくないのである、恋の成就があり得ないから、ということである。良之助には自分よりももっと優れた人が似合うというふうに考えている。しかし、このように釣り合うか釣り合わないかを考えるということ自体が、裏を返すと、千代の中で自分と良之助の結婚が状況が許せば(つまり自分が良之助に釣り合うような人間であるならば)あり得るものとして想定されている、ということを示すことになる。⁽³⁵⁾

先行研究はこの点をどう説明してきたのか。早く和田繁二郎氏は、「当時の家制度の慣習のなかでは、両人はまず結ばれ難い」という設定を施しながら、この条件が作品の悲劇に関与せず、「その現実的な条件の赴くところを全く無視して、ただ千代の片思いの悲劇へ道程を敷設していく」点に「この作品の大きな弱点ないしは破綻がある」と、特に納得のゆく説明をつけようとはせず、一葉の力不足と断じた（注30に同じ）。

一方野口氏は、千代が良之助の「配偶者として相応しくないとはい込んで居る」のは、「彼女の主観的に構築した良之助像が自分に比してあまりにも高い所に在るための劣等感」であって（二六頁）、それは、「著者が少女時代から持っていた劣等感」＝学校教育を女であることを理由に断念しなければならなかった経験に根ざす、「自分は可能性の少い、意思の発現に制約を受けた女性である」とする一葉の「真情」＝「潜在意識の投影と見られる」と言う（一八頁）。その結果として、「この物語を本来成り立たせるはずであった家族制度が「中垣」として描かれず、替りに著者が体験的に内在させていた壁を、千代の心理に投影させたため、自然さを欠くものと成った」と野口氏は述べている（二〇頁）。当時の社会制度と照らし合わせた時に整合性を欠くことになった原因を、作者の劣等感がヒロインに投影されたことに見る、ということであるが、一葉の日記「森のした岬 一」の、本論第一章でも引用した箇所前後にある「真情に訴へ真情をうつさば一葉の戯著といふともなかは値のあらざるべき」「千載にのこさん名一時の為にえや汚がす」（『全集三下』七二二―七二三頁）などといった発言を読むと、一葉の中には小説家として出発した初期の段階から、自己の能力や小説を通じての表現に並々ならぬ自負もあつたことが窺える。劣等感という側面のみを強調し、それを作品と直結させることにも疑問があるが、作者の体験と結びつける前に、なによりまず作品本文に即して登場人物たちの意識を読み取らねばならぬだろう。

屋木氏は本作が千代の心に焦点を絞り、「生身の他者との対話を欠いたままに、少女の中で一方的に増幅していった

「思ひの数々」を、その主観的意識に即して描き出すこと」に作品の主眼が置かれたため、それ以外の要素が後景に退いていると解釈している（六頁）。しかしいずれにしても、野口氏や屋木氏の説明では、法的な要素が千代以外の登場人物の認識としても一切描かれないということが、説明しきれないのではないか。

法的要因を意識しないというのが、もし千代にのみ見られることなのであれば、様々な理由を想定できるので、先行研究に疑問を呈するまでには至らない。例えば、恋の物思い故にそのことで頭が占められ、常軌を逸して常識的な判断を欠いている、或いは精神的に幼く世間の常識や法的知識などに関して無知である、などといったことを表そうとしているのだ、というように、いろいろな理由をつけることは可能である。しかし、これは作品内に於いて千代だけに見られることではない。野口氏の論やそれを踏まえた菅氏の注釈など、殆どの先行研究に於いて良之助の意識が考察から排除されているが、これは押さえておくべきことであろう。（下）で遅まきながら千代の思いを知った良之助は、次のように述懐する。

年頃日頃片時はなるゝ間なく睦み合ひし中になど底の心知れざりけん少さき胸に今日までの物思ひはそも幾何ぞ（中略）知らざりし我恨めしくもさらぬ君も恨めしく今朝見舞ひしとき瘦せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ形見とも見給はゞ嬉しとて心細げに打ち笑みたる其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせじをと我罪恐ろしく打まもれば

（二二頁）

千代の気持ちをもう少し早く知っていたらここまで衰えさせることはなかっただろうに、と後悔する良之助の内言からは、自分の対応次第でこの成り行きを回避できたという意識が窺える。この後良之助は千代の求めに応じて千代から贈られた指輪をはめた手を差し出す。⁽³⁶⁾この一連の流れを見る限り、良之助が千代の衰弱を回避するために自分が可能であつた行動として想起しているのは、彼女の思いを叶えるということ以外にあり得ないだろう。

唯一良之助の意識に言及している屋木氏は、この良之助の後悔を、「後戻りのできない地点に至る前に千代との間に適切な距離を置かなかったことに対するものと思われる」（二〇頁）と述べているが、いままさに恋死にしようとしている千代、衰弱して死に至るほどの思いの強さ、それらを目の当たりにした良之助の先の述懐を、もう少し早く知っていたら諦めさせることもできたのにと彼が思っていると解釈するのは、いかにも苦しい読み方である。距離を置いたからといって千代の思いを抑えられる保証はない。「知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく」といった表現からも、打ち明けてさえくれていればこの状況はいくらでも回避できたのにと、この成り行きを極めて遺憾に思っている良之助の心情が窺える。こうしてみると、千代だけではなく良之助の方も、恋の成就是可能という認識を持っているように描かれていると言えるのである。

また、野口氏は、「闇桜」冒頭部の叙述「隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一本に両家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり」（二頁）を引いて、「両家の間に横たわる侵し難い壁を「中垣の建仁寺」によって描き出し、その壁を意識しないかのような主人公達の無邪気な幼馴染の「春」を暗示するように、「両家の春」へと筆を進めて行く」（二二頁）と述べているが、このように言うとき、主人公たちが幼さのあまり壁を意識できないというような意味が出てきてしまう。しかし、「隔ては中垣の建仁寺にゆづりて」というのだから、両家を隔てるものは建仁寺垣のみということであって、これはむしろ隔てのない両家の親しい交際を主張している叙述である。その後も、「汲かはす庭井の水」と、一つの井戸水を分け合う両家の交際の清さ・深さが語られ、一本の梅の香を共に味わう両家の親密さと共に「梅一本に両家の春を見せて」とあるところから、両家の一体化と繁栄が強調されていると言える。これらの叙述から、両家の間に壁は存在せず、また壁を意識していないのも〈無邪気な主人公たち〉に限らない、ということになるだろう。実際二人の結婚が法的に絶対に不可であるなら、年頃

の二人が睦み合っているのに、それを放任している両家の親についても不審は拭えない。⁽³⁷⁾

更にもう一点疑問を示そう。「闇桜」と同時期に発表された一葉の作品「別れ霜」『改進黨新聞』明治二五・三・三一〜四・一七)では、主人公の新田家のお高と松沢家の芳之助は「一人子同志」の「いひなづけ」という設定であり、二人の「縁」は「親にゆるされ世にゆるされ」^{えにじ}たもので、お高が「人みぬひまの手習に松沢たかとかいて見て」とあるように、お高の嫁入りが想定されている(第一回、『全集』一九〜二〇頁)。この小説は新聞連載小説であるので、当時の常識にあまりにも反したことが書かれるとは考えにくく、こうした設定が当時の感覚に照らして特に非常識なものとは言えないのではないかと、いうことを窺わせる。

以上の諸点を見る限り、先行研究に於いて定説とされてきた千代と良之助の結婚をめぐる理解は、当時の法律を再度吟味して見直す必要があると言える。

② 明治二十年代に於ける一人娘の嫁入り

既に園田家の家督を継いでいる良之助が、中村家に婿入りすることは、野口氏や新大系注釈が指摘する通り、現実的ではないだろう。⁽³⁸⁾これには同意できるが、ただ、千代が中村家を出て園田家に嫁入ることはできないのだろうか。千代は一人娘であるので、作品内現在の時点では中村家の推定家督相続人である。旧民法財産取得編第十三章「相続」第二百九十七条には、「法定ノ推定家督相続人ヲ廢除スルコトヲ得ヘキ正当ノ原因ハ左ノ如シ」として六項目が挙げられており、それは野口氏や注釈が述べている通りである。ただし、右の傍線部から、例示されている以外にも認められる正当の理由というものがあろうにも読める。旧民法は明治二十三年に公布されたが、「日本の民俗習慣になじまないという批判が強く」『明治『旧法』集』旧民法解説)、結局施行に至らなかった。その後、明治二十九年に公布、三十一年より施行された明治民法では、推定家督相続人廢除に関する条文が改定されており、それは当然ながら、当

時の社会の実状を反映していると推測されるので、「闇桜」よりも時代が下るが、参考に見ておきたい。

以下で使用しているのは、法学者奥田義人が明治民法の条文に解説を加えた『法民相続法論』（明治三一・二一・一〇初版有斐閣書房）である。当時の法の理解を知ることができたため、本書を用いた。明治民法第五編「相続」第一章「家督相続」第二節「家督相続人」第九百七十五条では、「法定ノ推定家督相続人ニ付キ左ノ事由アルトキハ被相続人ハ其推定家督相続人ノ廃除ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得」として四項目が挙げられており、更にその後⁽⁴⁰⁾に「此他正当ノ事由アルトキハ被相続人ハ親族会ノ同意ヲ得テ其廃除ヲ請求スルコトヲ得」という、旧民法にはなかった文言が付加されている『相続法論』一〇六頁。この条文に対する奥田義人の解説には次のようにある。

實際上種々ノ事情ノ存スルアリテ本条第一項ニ列挙セル事由以外ノ原因ニ基キ廢嫡ヲ許サムルヘカラサル場合ナシト謂フヘカラス。例ヘハ極メテ貧困ナル家ノ推定家督相続人ヲ他家ニ收養シテ之ヲ教育セント欲スル場合ノ如キ廢嫡ノ上本人ヲシテ他家ニ入ルコトヲ得セシムルコトハ實際上有益且必要ニシテ從來ノ慣例モ亦普通ニ斯ノ如キ廢嫡ノ理由ヲ認ムルモノトス。故ニ本条第二項ハ第一項ニ列挙セル事由以外ニ於テ正当ノ事由アルトキハ被相続人ヲシテ廢嫡ノ請求ヲ為スコトヲ得セシメタルモノナリ。然レトモ濫リニ之ヲ請求スルコト勿カラシムル為メ此場合ニ於テハ特ニ親族会ノ同意ヲ要スルモノトス。（中略）又タ親族会ニ於テ認メテ以テ正当ノ事由アリトシテ同意シタルカ為メ直チニ其請求ハ正当ナルモノトナルニアラス。事実裁判官ノ判断ニ依ル判決ノ確定アラサルヘカラサルハ勿論ナリトス

（同、一一一―一二頁）

傍線部及びその後の具体例を挙げている波線部の文言からも、実際のところ、「慣例」によって「普通」に様々な理由による推定家督相続人の廃除が行われていたことが窺える。

さらに当時の判例に当たってみると、一人娘が他家に嫁ぐために廢嫡の手続きをとることが行われていたこともわ

かる。外岡茂十郎編『明治前期家族法資料』を見ると、例えば明治二十年二月二十二日付の福井県から司法省に対する伺いの第五条に次のようにある。

独女子ヲ他へ遣ハシ又ハ女子ヲ措キ相続ノ為メ養子ヲ迎フルトキハ廢嫡ニ準スヘキ旨去ル十六年十二月一日内務省御指令ノ次第モ有之由（中略）然ラハ茲ニ三女子ヲ有スル戸主アリ二女子ハ既ニ他へ遣ハシ殘ル一女子モ亦他へ遣ハサントスル時ハ仮令一女子ナリト雖トモ均シク独女子ト同一ノ資格ヲ有スル者ニ付廢嫡ニ準シ取扱フニ非サレハ權衡其平ヲ得サル哉⁽¹⁾

引用部前半から、一人娘を廢嫡して他家に嫁入らせ、その家は養子を迎えて存続させるということが認められていたことがわかるが、引用部の後半は、三人娘のうち二人は既に他家へ出し、残る一人も同様にする際に廢嫡の手続きをとるべきか否かという問い合わせであり、できる限り手続きを簡略化したいという人々の実情が窺える。これに対する明治二十一年三月八日付の司法省の指令は、「廢嫡ニ準ス可キモノトス」であつた（同書、二五頁）。また、明治二十九年四月一日付の鹿児島県からの問合せでは「女子ヲ有スル戸主カ養子ヲ迎エタ後、右女子ヲ他家へ婚嫁サセ又ハ養女ニ遣ワス場合、右女子ニ付キ廢嫡手續ヲナスコトノ要否」が問われている。つまり、「養子入籍後ハ嫡出子ト等シク權利義務ヲ有シ且男子ハ女子ニ先ツテ相続權ヲ有スル成例ナレハ自然養子ニ推移」するため、女子を他家に出すに当たつてわざわざ廢嫡の手続きを踏まなくても良いか、という趣旨であるが、同年五月十二日付の司法・内務両省回答では、「養子ヲ為シタル後ト雖モ相続權ハ尚ホ女子ニ存スルヲ以テ（中略）其廢嫡ヲ要ス」というものであつた（同書、五八四頁）。

これらの例を見ると、手続きが必要であり、それなりの煩雑な手間を要したとは思われるが、一人娘が他家に嫁ぐための廢嫡は届出により可能であり、それが実際に行われていたことは明らかである。

③ 結論

以上より、手続きを踏む必要があるにしろ、親や親族の同意が得られれば、千代と良之助の結婚は当時の司法の慣例から認められないとは考えられず、養子を迎えれば中村家も存続が可能であると言える。本章①冒頭で引用した新大系注釈の波線部で、「彼女を廃嫡し、その上で養子をとることが法律上可能であるかどうか、条文からは判定しかねる」と述べられていた部分を、今回補うことができたと言えるだろう。そういったことは当時の世の中で実際に行われていることから、同注釈にあるように「多大な困難を伴う」とまでは言えないだろう。よって、一人子同士という設定が、「二人の恋愛の成就を決定的に阻む要因となりうる」とは言えないと判断できる。

①で見た一葉の「別れ霜」の例も、お高は一人娘なので推定家督相続人であるが、それを排除して松沢家に嫁入らせ、新田家は家を継ぐ養子を迎えることができるということを一葉が想定して執筆していると見られる。「別れ霜」本文にあるように、親の同意さえあれば世間にも認められ、特に問題のない結婚の形態と見られる。

こうしてみると、①で考察したように、中村・園田両家の繁栄を一本の木に象徴させている「闇桜」冒頭の両家の一体化を示す叙述は、先行研究で言われてきたこととは逆に、むしろ二人の結婚の可能性を暗示していると受け取れるのではないか。実際千代と良之助は結婚を考えてもおかしくない年齢だが、両家の親が他の人物との結婚を進めている様子もなく、二人の睦み合う関係を許容している。これらを鑑みると、一葉は二人の結婚を可能なものと意識して執筆しているのであり、そうした外在的な障害を排除して、ヒロインの心一つに小説を動かす力を意識的に与えていると言えるのである。屋木瑞穂氏は、同時代小説の調査を通して、「幼馴染みの間柄で自然に育まれてきた清純な恋の成就が家族の干渉によって阻まれるという筋の展開は、同時代小説の一つの典型でもあった」と述べている（五頁）。そういう状況の中で、良之助と千代の結婚の障害になるのは他ならぬその良之助を好いているヒロインの心である、

という設定にしたところがこの作品の眼目であり、斬新なところと言えるのではないだろうか。

四 心に吹く風——結びにかえて——

本論一章冒頭で引いた笹淵氏の指摘以来、「闇桜」が千代の心理描写に終始して社会性を欠如させているといった見方が続いてきた。⁽⁴²⁾ そうした評価を見直す契機となったのは、橋本威氏の見解である。『伊勢物語』第四十五段に筋の展開を借り乍ら、『伊勢物語』のそれが全く表現しなかった「むすめ」の心理を、この短い中に、かなり精細に描き出している⁽⁴³⁾、「寧ろ「専ら千代の心理描写だけに頼つてゐる。」ところに、『闇桜』の価値は、先ず見出せるのである」といった、笹淵氏が低評価を下す要因としたまさにその点こそが評価に値するのだ、というこの指摘が転換点となり、従来の評価の流れを変えたと言える。⁽⁴⁴⁾

本論も研究史のこの流れには賛同するものであるが、特に本論では、恋愛の成就を阻む外在的要因を排除して千代の心一つに焦点を絞り、従来外在する要素によつて翻弄されるヒロインを多く生み出してきた先行作に対して独自性を出す、そうしたことを一葉が意識的に行つてゐるらしい執筆のあり方を浮かび上がらせた。

ヒロインの心に小説を動かす力を付与し、それによつてむしろ周囲の登場人物が翻弄される本作では、もはやヒロインは外から吹きつける風によつて散らされるような存在ではなく、自らの心に吹く風によつて、ひとりで散る力を持ち得ていると言える。⁽⁴⁵⁾ そうした意図を、冒頭部と結末部の言葉の対照によつて明確に示し、本作とは対照的な「朝顔日記」を引き合いに出し対比させることで本作の特色を強調し、中村・園田両家の関係や良之助の意識を描くことで二人の結婚の可能性を暗示し、ヒロインの心以外に恋愛を阻む要素を持たせないようにした。

そのようにして本作（中）（下）では、千代の心が全面にせり出してくるように描いているが、そこにはまたどう

いった一葉の意識・試みが見られるだろうか。それを考察する別稿を準備しているが、さらに、今後半井桃水の小説との比較を改めて行うことで、上記のような本作の特色について桃水の指導がどの程度及んでいる可能性があるのか検証してみることも課題と言える。

*本稿は、二〇一三年度以降の京都女子大学での「講読近代」の授業内容の一部を基にしている。

注

- (1) 湯地孝『樋口一葉論』(大正一五・一〇・五 至文堂) 第三章第四節、一一九頁。引用は日本図書センターの復刻(一九八三・七・二五)による。先行研究の引用については、すべて二回目以降は著書や掲載誌の頁数のみ示す。なお、本論文では文献の引用に際し、漢字の旧字体や変体仮名は通行の字体に改め、ルビは適宜省略した。引用文中の傍線・傍点等は論文執筆者によるものである。

- (2) 笹淵友一『「文学界」とその時代下』(一九五八・一・一 明治書院 第八章第一節、一一九四頁。

- (3) 同右。

- (4) 塩田良平『樋口一葉研究(増補改訂版)』(一九六八・二・二三 中央公論社) 第五章第三節の一(三九〇頁)、関良一『樋口一葉 考証と試論』(一九七〇・一〇・二〇 有精堂) 所収「二葉小説成立考」(八六〜八七頁) など。

- (5) 「につ記 一」、『樋口一葉全集 第三卷(上)』(一九七六・二・一五 筑摩書房) 九五頁。以下同全集を『全集三(上)』というように略記し、発行所名を省略する。

- (6) 「よろしかるべし これ出し給へ」と言われたことが記されている(同右、九六頁)。

- (7) 「につ記 二」、『全集三(上)』一〇一頁。

(8) 十三日、十四日の記述ともに、右に同じ。

(9) 野口碩氏は、この十五日に桃水に届けられた原稿（未定稿B）が、「(中)の本文は(上)のすぐあとに書き継がずに、余白を残して折返し裏から始まって」いること、「(中)（下）は、「闇桜 中」「やみぎくら 下」と題して始まるのに対し、(上)の「闇桜 上」と署名「一葉稿」とは、欄外に書き入れてある」こと、などから、「(上)と(中)（下）の浄書が段階的に行なわれた事を感じさせる」と述べている。『全集一』（二九七四・三・二〇）「闇桜」補注、一六頁。

(10) 「闇桜」の引用は初出により、以下頁数のみ示す。初出誌『武蔵野』は、『複製版武蔵野』（二〇〇四・九・一 雄松堂出版）によった。

(11) 前出「闇桜」未定稿Bでは、本論の前の二段落で引用した箇所は「齡ひ」「親心には」「か、ねの音」の三カ所以外は初出本文と異同はない（未定稿の引用は『全集一』一〇・一六頁による）。構想を練る段階で本章で述べたような文章の緊密な対照といったレベルにまで桃水の指導が及んでいた可能性を完全に否定はできないが、桃水の添削の跡が残るような草稿は現存せず、二月四日に持参した草稿に桃水が細かい指導を施した様子も日記からは窺えない。本章で問題にしている文章は一葉による表現と考えてよいと判断できる。「よもきふ日記 二」の明治二十四年十一月二十四日に、桃水の許を訪れた一葉が「骨子は片恋といふことにて侍りとて其筋だてなどかたる」と、小説の趣向の相談をし、「其くだりはかくくせばよからん こゝはかくせばなどの給ふ」と、口頭で指導を受けたことが記されている（『全集三(上)』八一頁）が、この時点では未だ文章化した草稿はなく、指導の具体的内容は不明である。

(12) 例えば山田有策氏は、「ふんだんに縁語、掛詞など和歌的修辭を駆使し、しかも古歌を下敷きにした表現を前面に押し出しているため、王朝文学の単純な模倣に終わっている」「空疎な作品」と評している。「日記と小説のはざま——虚構としての一葉日記」「国文学」（一九八〇・一二 学燈社）初出、『深層の近代——鏡花と一葉』（二〇〇一・一二五 おうふう）所収、二二八・二二九頁。

(13) 『全集三(下)』（二九七八・一一・一〇）七三二〜七三三頁。「森のした艸 一」は表書に「明治廿四年十一月」とあり、末尾の断章

の執筆時期は、『全集三下』の「補注」で、「この十一月から翌二十五年三月に『武蔵野』第一編に「闇桜」が載るまでの間と推定され」ている（七二三頁）。断章冒頭に「小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ」（七三二頁）とあるので、桃水に弟子入りしたのが明治二十四年四月であることから見て、明治二十五年初頭から三月頃までに執筆されたと見てよいだろう。

(14) 和田芳恵注釈、日本近代文学大系『樋口一葉集』（一九七〇・九・一〇 角川書店）五二頁頭注一・二など。

(15) 新日本古典文学大系明治編『樋口一葉集』（二〇〇一・一〇・一五 岩波書店）六頁、脚注三二。

(16) 明治十年代から「闇桜」発表の二十五年までを対象として見てみると、『朝顔日記』と題する草双紙が多く出版されており（国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧できるもので十一件、上・下に分割されているものは合わせて一件と数えた）、その内、島田の宿の場面で琴を前にした深雪（朝顔）の絵があるものは十件、右と同じ年代の義太夫正本でも、口絵も含め島田の宿の場面の絵が入っているものは七件あったが（書名・出版等の年月・出版地の順に列記すると、『朝顔日記宿屋の段』（明治一五・五 東京）、『絵本新選倭文範』（明治一八・九 愛知）、『絵本大和文庫』（明治二一・三 大阪）、『生写朝顔日記全』（明治二一・六 東京）、『生写朝顔日記』（明治三二・一〇 大阪）、『生写朝顔日記』（明治二四・二二 大阪）、『絵入義太夫正本』（明治二五・三 東京）、いずれも楽器は琴であり、表紙に琴の絵が描かれているものもあった（右列記の五件目）。同年代での例外は、草双紙『実説朝顔日記下』（明治一三・二・四御届、編輯兼出版人日本橋大西庄之助）と読本『人情朝顔日記』（明治二三・二・一三翻刻出版 神田日吉堂）で、両作とも、同場面の絵で深雪が奏でているのは三味線である（後者は口絵でも深雪が手にしているのは三味線であるが、宇治川や明石の浦の場面で深雪が弾くのは琴であり、宇治川の場面の挿絵にも琴が描かれている）。以上、若干の例外はあるものの、この数値から見て深雪＝琴というイメージは定着していたと推測される。

(17) 平出鏗二郎『東京風俗志上巻』（明治三三・一〇・二八 富山房、明治三十一年十二月序、引用は覆刻版（平成二・六・二五 富山房）による）第二章第二節「窮民の業―辻芸人、物貰」に、「門附は三味線弾きて立つのみならで、二人の女性の琴をかつぎ来りて、爪音細かに掻き鳴らすがあり」（五三三頁）という記述が見え、縁日の場での実際について確証はないが、琴による演奏も行われていた可能性はある。但し傍線部のような記載の仕方から、三味線の方が一般的であったとは言えるだろう。

(18) 拙著『一葉文学の研究』(二〇〇六・三・二四 岩波書店) 第八章(二三三―二三六頁)に於いて、先行研究を踏まえて整理している。

(19) 国立国会図書館デジタルコレクションにより閲覧。奥付の発行日は、墨書で「廿一」と書き入れがある。

(20) 拙著『一葉文学の研究』参照。

(21) 阿曾次郎と同行していた僧月心が、阿曾次郎と深雪の結婚について次のように言及する。「先達でも申通り拙僧が和歌の友、秋月弓之助方へ貴所を人家させ申さんと、兼て咄し置しが先にも懇望貴所も承知、近々日を見て見合致させ申さん」(宇治の段、一〇頁)。

(22) 以下の詞章の特に傍線部参照。「したひきて慕ひよるべの蛩さへ妹背かはらで逢夜半を、重ね扇の風薫る、匂ひをしたふ薦かつら、ながき契やつくも髪」(宇治の段、九―一〇頁)。

(23) 阿曾次郎は当座の興に乗じて詠んだ和歌を短冊に認めるが、風に吹き上げられたその短冊は、川辺の或る船に落ちる。折からその御座船の内より洩れて来る「三昧の音」と謡う声(注22参照)に、同行の月心から「日頃物堅い貴所」と評される阿曾次郎も心惹かれ、「誂しひ調べ声といひ曲といひ芸能器量も揃ひし美人ならん、ア、惜むらくは傍に居て聞ざる事の残念といふ」(以上、九―一〇頁)。一方船の方では「舷」に落ちた短冊を乳母が取り上げ、深雪に渡す。短冊に書かれた和歌を詠じた人に「誰口ずさみぞ床しや」と深雪が思いを馳せるやいなや、「と見やる陸には阿曾次郎、思はず見合す顔と顔、互に見とれる目の中に通ふ心を岩橋の、渡してほしき思ひなり」と、二人は一目で互いに惹かれ合ってしまう(二〇―二二頁)。折から狼藉者が深雪の船に入り込み、阿曾次郎が船に乗り込んで退治するという展開を経て、深雪が金地に朝顔が描かれた自分の扇子に何か一筆書いてほしいと所望、阿曾次郎が記した歌を見た「深雪は嬉しげに押戴て打詠め、(中略)かはゆらしい朝顔の歌一生放さぬ私が守りと、云つゝ」深雪も短冊に「恋慕ふ心通はす風もがな人目隔つる君があたりへ」という歌を書き付け、意思表示する。「見る影もなき某をアイふと見初しが思ひの種 不便と思ふて給はれと、じつと、寄添抱付直に障子をしめからむ、松に這てふ藤かつらいか成夢や結らん」と、思いを伝え合った二人は逢瀬へと、急速に展開する(以上、一四―一五頁)。そこへ阿曾

次郎の伯父、駒沢了庵より「家督を受継鎌倉へ下」れとの伝令が来て、二人は逢瀬の途中、引き裂かれる。深雪が「云残した事も有、せめて今宵は此船にと取付敷けば」、「尤々去ながら聞るゝ通り火急の御用、最前扇に認し、朝顔の唱歌を我と思ひ、廻りあふ時節を待れよ」となだめる阿曾次郎は再会を約す（以上、一五頁）。

- (24) 注16にあげた草双紙や読本では、不意に旋風が吹き起こって深雪の帽子を空に巻き上げ、落下してくるそれが阿曾次郎の船に落ちかかったところで、彼が扇で受けとめる、というようにやや設定が異なるが、風が二人の出逢いのきっかけを作るところでは同じである。

- (25) 深雪が「ふつと見初た阿曾次郎さま、御国元から急用との使は恋の障りの雲」（岡崎の段、二九頁）と回想しているように、出逢った当初から二人の恋路は外から降り掛かってくる物事によって阻まれることがヒロインの意識としても明確に描かれているが、その後も同様のパターンが繰り返されてゆく。浪人していた深雪の父弓之助が、火急の事態により国元から召され、一家も急遽帰国することになり（岡崎の段、三一―三三頁）、明石の浦で風を待って停泊する船の中、深雪は阿曾次郎が扇に認めた歌を謡い、琴を弾く。それを媒介に、たまたま明石の浦に居合わせた阿曾次郎と再会し、二人は互いの気持ちを確認し合い、共に行く決心をする。が、両親に書き置きを残すため、深雪が一旦自分の船に戻った途端、風が吹き出したことを知った船頭らが、突如船を出航させ、再び二人は引き裂かれる（明石船別れの段、三三―三五頁）。

- (26) 拐かされ遊里に売られそうになる（小瀬川の段）摩耶が獄の段、乳母浅香と再会するが、身を挺して悪者から深雪を守った浅香が落命する（浜松の段）、島田の宿で阿曾次郎と再会するが盲目のため気づかず、公務により出立した彼を後から追うが、雨で増水した大井川に阻まれる（宿屋の段）、など。

- (27) 例えば深雪の目が治るのは、「唐土伝来の目薬」を「甲子の年の男子の生血にて服する」ことによるという設定で、それは阿曾次郎が停泊していた島田の宿「戎や」の主人徳右衛門（実は乳母浅香の父）の犠牲によって可能となる（宿屋の段、一二―一三頁）。

- (28) 橋本のぞみ『樋口一葉 初期小説の展開』（二〇一〇・一二・二〇 翰林書房）所収、第一部第一章『闇桜』——「花」レトリック

クからの逸脱——」三四頁。

- (29) 屋木瑞穂「樋口一葉『闇桜』の位相——(筒井簡)変奏——『近代文学試論』第三八号(二〇〇〇・一二・二五) 広島大学近代文学研究会 六頁。

- (30) 和田繁二郎『明治前期女流作品論——樋口一葉とその前後——』(一九八九・五・一〇 桜楓社) 第八章第二節、三八一頁。

- (31) 満谷マーガレット「狂気」と青春不在——『闇桜』を中心に『国文学』(一九九四・一〇・一〇) 学燈社 七七〜七八頁に、一人娘であるため「家を継ぐために養子を迎えなければならない立場にもかかわらず、結婚が許されない相手を愛した」、「園田の主人」の死後家を継いでいる以上、良之助が千代と結ばれることはありえない」などとする。

- (32) 滝藤満義「一葉初期小説論——『闇桜』から『暁月夜』まで」に、「『闇桜』の男女は、初手から双方の家の重荷(中略)を負わされ、およそ自由な恋愛は封じられている」とある。『千葉大学人文研究』第二五号(一九九六・三) 初出、『一葉文学 生成と展開』(一九九八・二・二〇 明治書院) 所収、四一頁。

- (33) 野口碩「誇張された片恋——『闇桜』研究ノート」『論集樋口一葉』(一九九六・一一・一〇) おうふう。

- (34) 注29の論文に於いて、満谷氏と同様の見解を示している(五頁)。

- (35) 猪狩友一氏が千代について、「恋の自覚は娘を極端に内向的にし、また、(君様が妻と呼ばれん人)云々とあるように、結婚を意識させる」が、相手には自分は「不似合いだと一人決めている」と述べているが、この発言のみでそれ以上の考証はなされていない。「美登利の変貌」私解『湘南文学』第二一号(一九九七・一〇・二〇) 神奈川歯科大学・湘南短期大学 三三頁。

- (36) 石井文恵氏は、同時代小説の例を複数挙げて、「指輪」が女性が男性への思いを告げる道具として用いられている」ことを指摘している。「樋口一葉『闇桜』論——千代の恋愛をめぐる——『文研論集』第三〇号(一九九七・一〇・一) 専修大学大学院学友会 六〜九頁。

- (37) この点を和田氏は「不自然」と評し(三八二頁)、屋木氏も同様に「不自然」としながらも、この作品が千代の心に焦点を絞ったことでその他の要素が排除されたというように解釈している(五〜六頁)。

(38) 旧民法の条文は、新大系補注二(四九九頁)に挙げられており、『明治『旧法』集』(一九八三・二・二〇 国書刊行会)一四頁・三三頁などでも確認できるので、引用は繰り返さない。要約すれば、人事編第七章第一百七条・百十一条より、家督相続をする男子がある場合は養子を迎えることはできず、また、既に家督を継いで戸主となっている者が他家の養子となることはできないので、園田家は良之助以外に養子を迎えることはできず、戸主である良之助が中村家の養子になることはできない。また、同第十三章第二百五十一条・二百五十三条より、戸主はその家を廃することは原則できないが、婚姻によって他家に入る場合は、自分の家は廃家し、家族も連れて他家に入ることになる。つまり、良之助が千代との結婚によって中村家に入る場合、園田家を存続させることができない。

(39) 失踪、民事上の禁治産及び准禁治産、重禁錮一年以上の処刑、家政を執ることが不可能な不治の疾病、祖父母・父母に対する罪の処刑、重罪による処刑の六項目。『明治『旧法』集』五八～五九頁。

(40) 二 被相続人ニ対シテ虐待ヲ為シ又ハ之ニ重大ナル侮辱ヲ加ヘタルコト 二 疾病其他身軀又ハ精神ノ状況ニ因リ家政ヲ執ルニ堪ヘサルヘキコト 三 家名ニ汚辱ヲ及ボスヘキ罪ニ因リテ刑ニ処セラレタルコト 四 浪費者トシテ準禁治産ノ宣告ヲ受ケ改悛ノ望ナキコトの四項目。『民相続法論』一〇五～一〇六頁による(国立国会図書館デジタルコレクションにより閲覧)。

(41) 外岡茂十郎編『明治前期家族法資料』第三卷第二冊(一九七一・一一・一〇 早稲田大学)二四頁による。

(42) 例えば西尾能仁氏は、「恋愛をも含めて人生の掘りさげの足りない、全く初歩的な少女小説で、もちろん社会を見る眼などは全く姿を消している」と評している。『一葉・明治の新しい女思想と文学』(一九八三・一一・二〇 有斐閣出版サービス)第一章、三七頁。

(43) 橋本威『樋口一葉作品研究』(一九九〇・一・三一 和泉書院)第一部一―4、三四頁。当該箇所の初出は、『梅花女子大学文学部紀要 22』(一九八七・一二)。

(44) 関礼子氏は、橋本氏の言葉を用いながら、「この少女の『恋情至上』のおもいにこそ、テキストの生命がある」、「いっけんあわ

あわしく、しかしその実かなり強靱な一少女の「恋情」の劇、「恋する主体としての女性をはじめて焦点化したという意味で注目されてよいテキスト」などと、「闇桜」を評価している。「縫ひとゞめ」る心——『闇桜』『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』（一九九七・四・一 新曜社）二二〇・二二六・二三〇頁。なお、本論第三章①で引用した、作品の主眼についての屋木氏の見解も、この流れに沿ったものであり、その後も千代の恋情を集中して描いている点を重んじようとする論が主流となっている。

- (45) 一葉は、雑記4「しのぶぐさ」（明治三三年五月〜九月）の中の「朝がほ」という断章で、「大方花のゝどかなるも月の哀なるもおのが心の雲も風もなくてこそあれとやうく」に思ひ成ぬ」と、自分の心の揺らぎ、葛藤を、自らの心に吹く風として捉えている例がある（『全集三（下）』六一四頁）。

（本学教授）